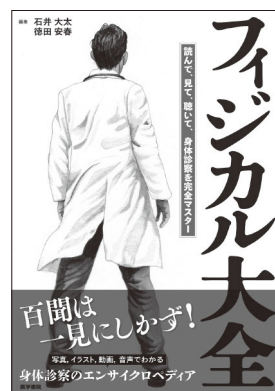


フィジカル大全

読んで、見て、聴いて、身体診察を完全マスター



評者 山中克郎（諏訪中央病院）

かつて新型コロナウイルス感染症の拡大によって、私たちは「触れない診療」を余儀なくされた。聴診器を胸に当てることさえもためらわれた時代を経て、いま、身体診察の意味があらためて問われている。

AI 時代を迎え、医学知識の「暗記」にはかつてほどの価値がなくなりつつある。むしろ、患者が語る言葉の背景にある「物語」に耳を傾け、意味付けを施し、適切な問診と身体診察によって診断に迫る力が、これからの臨床医には求められているのだ。

本書『フィジカル大全』は、そうした変化の中で、医師にとっての原点とも言える「身体診察」に再び光を当てる。通読しながら、自身の診察に曖昧な部分があることに気付き、大切な手技に印を付け診療スタイルを見直すきっかけとなった。

特に循環器や神経内科の章は秀逸で、音声や動画による心音や身体所見の提示が印象的である。診察という行為は、教科書を読むだけでは決して身につかない。にもかかわらず、他者の診察を実際に見学する機会、医師になってからは意外なほど少ない。本書はそのギャップを埋め、手技の「共有知」として貴重な役割を果たしている。

診断において、最も大きな比重を占めるのは「問診」である。患者の語ることに耳を傾け、背景や物語をくみ取るこの作業が、診断の 8 割を決める。残りの 2 割のうち、1 割は身体診察、もう 1 割が検査による。問診によって診断の輪郭が浮かび上がり、身体診察によってそれを確かめ、検査が最後の裏付けとなる。身体診察の診断的な寄与は 1 割かもしれない。だが、患者の体に触れるという行為は、単なる診断以上の意味を持つ。

私自身、上部消化管の検査を受けたときのことを、今も鮮明に覚えている。苦しさに耐えていた私の背中を、看護師さんがそっとなでながら言った。「つらいですね。でも、もうすぐ終わりますよ」。その一言と優しい手のぬくもりに、どれほど救われたことか。

本書は、身体診察を初めて学ぶ初期研修医にはもちろん、自らの診療を再点検しようとするベテラン医師にも強く薦めたい。「診る」という行為が、単なる確認作業ではなく、患者の人生にそっと寄り添う行為であることを、この本は静かに教えてくれる。